

## 地図の民話スポットで

声に出して読もう！

原話資料 (一) 進藤秀樹・竹原威滋・丸山頭徳編 『奈良市民間説話調査報告書』(奈良教育大学刊)

(二) 阿部奈南・進藤秀樹・垣崎仁志編 『月ヶ瀬村の伝説と世間話』(『昔話―研究と資料 29号』)

(三) 島田芳夫編 『大和の伝説 覚え書』(稿本)

(四) 高田十郎編 『大和の伝説 増補版』(大和史蹟研究会刊)

再話 村上郁

### ① 柳生石舟齋と二刀石

資料 (一)

むかし、柳生石舟齋は、磐立神社のあたりで、毎日剣の修行をしてたんやて。そして、ある晩、天狗が出てきてな、石舟齋に襲いかかってん。石舟齋は、その天狗を「やあつ」と二刀のもとに切りすてたんや。ところがな、明くる日行ってみたら、天狗おらへん。そこにあった大きな石がまっふたつに切れててん。ほんで、その石を二刀石と呼ぶようになってん。

### ② おふじ井戸

資料 (1), (3)

柳生宗矩は、春日大社の宮司のとこへ、よう囲碁打ちにいったんや。

ある日、宗矩が、いつものように馬に乗って、かえりばさ峠越えて阪原村まで来たらな、道端の井戸で、娘がひとり洗濯をしててん。宗矩は、いきなり馬とめて、「これこれ、娘、その桶の波の数はいくつあるか。」て聞かはってん。娘はすぐに、「はい、二十一波でございます。」て答えてん。波(な・み)、七と三で、ひちさん二十一やろ。ほんで二十一波と答えたわけや。ほな、こんどは娘が、「では、お殿様、柳生から奈良まで馬の足跡いくつございますか。」て尋ね返してん。宗矩は答えられへんかってん。ほんで、(かしこい娘やなあ)て感心してしまわはってん。

この娘が宗矩の側室になったおふじの方や。柳生家の菩提寺芳徳寺の列堂和尚のおあさんや。村の人は、この井戸を「おふじ井戸」て呼んで、今もこんなと湧き水があふれてんねんで。

おふじが馬に乗って宗矩のとこへ嫁入りする時、母親が、阪原村と柳生村の間の峠まで見送って、別れを惜しんだんや。そこを今も「かえりばさ峠」て呼んでるねん。

### ③ 十兵衛杉

資料 (二)

むかしは、柳生家のお墓は中宮寺にあったんや。

あるとき、十兵衛は、江戸に向けて剣の修行に行くことになって。ほんで、出かけるときに、(いつ帰ってこられるやわからへん。どないなるやわからへん)と思うて、先祖のお墓にお参りして、杉の木を植えて挿んだんやて。

それが大きくなって、十兵衛杉て呼ばれるようになってんけど、あるとき雷が落ちてね、枯れてしまうたんやて。

### ④ 広岡の腰痛地蔵

資料 (一)

むかし、広岡町に普光寺というお寺があってん。そこに六体地蔵さんがあって、腰痛地蔵て呼ばれるねん。お参りしたら腰痛がなおるというてむかしの人はようお参りに行かはってん。

あるとき、ひとりのおばあさんが、きんちゃくに白のお米をちよつと入れて、杖ついてお参りに行かはってん。毎日毎日行って挿んだけど、なかなか良うならへん。

ある日、おばあさんは、

「私もう腰も痛いし、生きてても用がない。はよお迎えに来てください。」いうて挿みはってん。そして、六体地蔵さんがあらわれて、

「わかった。明日さっそく迎えにきてやる」ていわはってん。おばあさん、びっくりして、「明日のこんどのそのこんどで結構です」ていうて

ん。ほな六体地蔵さんは、

「わかった。明日のこんどのそのこんどに迎えに来てやる」ていわはってん。おばあさん、あわてて、「明日のこんどのそのこんど、もひとつこんどのそのこんど、またもひとつこんどのそのこんど」て、くり返しくり返し挿んで、帰っていつてん。

この六体地蔵さん、ようきいてくれはるそうや。

### ⑤ 茗荷の地名由来

資料 (一)

むかし、あるお寺に、和尚さんと小僧さんがいててん。小僧さんは、物覚えが悪うて、お経を教えてもろても何を教えてもろても、なあんにも覚えへんかってん。

そのうち、小僧さん、病気になるて死んでしまうてん。

そしたら、お墓のまわりに、何かの芽がようけ生えて来てん。村の人は、「妙なもんが生えてきた」というので、その芽を「茗荷」という名前にしたんやて。そやから、茗荷食べたら、物忘れするんや。

茗荷ようけ生えるから、ここを茗荷町いうようになってん。

## ⑥猿の肝

資料 ③

あるとき、竜宮城の乙姫さんが、

「猿の肝を食べてみたい」といわはってん。みなが、「猿で、どこにおるんや」というて困ってたら、阪原村から小間使いに来てたひらめが、

「私の村に、市窪猿いうりっぱな猿がおります」というてん。

そこで、阪原村に竜宮の宮測を作って、阪原村と竜宮城をつなぐ道を作ったんや。ほんで、年寄りの亀が、市窪猿を竜宮城までつれて来ることになっぺん。

亀は、新しい道のおかげで、あつというまに阪原村に着いてんて。ほんで、川におった亀に道教えてもろて市窪山登っていつてん。ほしたら、大きな柿の木の上で、市窪猿が居眠りしてたんや。亀は、

「今夜、竜宮城で、新しい道ができたお祝いをしますねん。私と一緒に来てください」というてん。市窪猿は喜んで、亀の背中に乗って竜宮城に行っぺんて。

竜宮城に着いたら、ひらめがそつと市窪猿に近づいて、

「おまえは、今晚、乙姫さんに肝食べられることになっぺんねんで」というてん。

それ聞いた市窪猿は、竜宮城の奥の本殿の前まで来たとき、

「おれ、えらいことしてしもうた。今日は天気がよかつたんで、肝を洗うて柿の木にほしてたんや。その肝そのまま置いてきてしもうた」

亀、あわてて市窪猿を乗せて肝を取りにもどつてんて。阪原村に着いて、柿の木の下まで来ると、市窪猿は、木の上にするすつと登っていつてん。亀が木の下でなんぼ待つても、市窪猿下りてきいひんかつてんて。

亀は竜宮城に帰つてから、えらいおこられてん。ひらめは、二度と川にもどらしてもらえへんかつてんて。

## ⑦水間峠の地蔵

資料 ①

むかし、堺の猟師さんらが、夜に魚とつてたら、東のほうから、ぴかぴかつと光がさしてきてん。それがえらい明るうて、漁がでけへんねんて。しかも毎晩続いたから、猟師さんらは困つてしもうて、どこで何が光ってるのか探して、光をたどつて行つてんて。ほしたら、水間峠まで来てしもうてん。水間峠のつべんに、小さいお地藏さんがあつて、それが光つてんて。

堺の猟師さんらは、水間の村の人らに、

「頼むさかい、お地藏さん下ろしてくれ。お地藏さんの光が堺の海までどいて、漁がでけへんのや。そのかわり、毎年魚持つてくるさかい」というて、頼んだんや。

水間の人らが、お地藏さんをずうつと下に下ろしたら、堺でも漁ができるようになつてんて。堺の人らは、毎年水間にイワシを持つていつたいうことや。

## ⑧天狗の石合戦

資料 ①(4)

むかし、神野山の天狗が、青葉山の天狗をからこうて、えらい怒らしたんや。ほんで、けんかになつて石の投げ合いしてん。

青葉山の天狗は、ごつつい石やら草を、なんぼでもぼーんぼーん神野山に向けて放つたんや。そしたら、その石がたまつて鍋倉ができてんて。

神野山の天狗は、弱いふりして、あんまり石投げへんかつてん。そしたらな、青葉山は石や草がなくなつて、はげ山になつてしもうてんて。ほんで、神野山は頂上に草がようけ生えたあんねん。

## ⑨園生姫の話

資料 ⑤

むかし、後醍醐天皇が、京の都を追われて笠置の行在所に逃げてきはつたときのことや。園生姫いうきれいなお姫さんを連れてはつてんて。敵が攻めてきて逃げる途中、お姫さん、家来にはぐれてしもうてん。お姫さんは、山の中、なんにも食べんとひとり逃げてな、森の中で倒れて起きあがれへんようになつてんて。

朝になつて、尾山の村の者が森へ薪とりにきて、お姫さん見つけてん。ほんで連れて帰つて介抱したんやて。お姫さんは尾山で暮らすことにしたんや。

ある日、お姫さんが天神さんにお参りに行つたら、梅の木に実がすずなりになつてん。お姫さんは、梅の実とつて帰つて、炭火で一晩中いぶつて天日に干して、まっ黒な梅を作らはつてんて。ほんで、

「これは烏梅いうて染め物の薬です。京へ持つて行って売つたらよろし」といわはんねん。村の者は、

「こんな黒い梅、売れんのやろうか」といいもつて、教えてもろたとおりに烏梅をようけ作つて京の都へ持つていつたんや。そしたら、えらい高い値段で売れてんて。村の人はびっくりしてん。

「えらいこつちや」

「こんな黒い梅、こんなえらいもんが高う売れるぞ」

それから、尾山でも、隣村でも、山に梅の木ようけ植えるようになつてん。これが、月ヶ瀬梅林や。ほんで、尾山のもんが園生姫を助けた森が「園生の森」で、ええ温泉がわいたあんねんで。